

ヨセフ・アロイス・シュムペーター

補遺稿「資本主義・社会主義・民主主義」

シュムペーター章句集成

<刊行本に用いられなかった廃棄手稿、論点整理につくられた手稿、
テキスト各部の構成に用いられた手稿、ノート類等>

編集（含 解説と日本語訳及び摘要）
農学博士 浦城晋一（三重大学名誉教授）

協力者 アーサー・ハイム
井上孝榮

補遺稿

資本主義、社会主義、そして民主主義

ヨセフ・A・シュムペーター稿 ハーヴァード大学経済学教授

序文(第1版)

第1版から第2版までに書かれた本書についての
所感的並びに反省的コメント

「資本主義・社会主義・民主主義」第2版のための変更

第I部 マルクスの体系

第II部 資本主義は生き延びうるや？

第III部 社会主義は作動しうるや？

第IV部 社会主義と民主主義

第V部 第I・II次世界大戦と社会主義政党
対 アメリカ経済とケインズ理論

目次
(0-1)

表紙・目次		・・・ 1
	ページ 0-(1)	
序文(第1版)		・・・ 6
	ページ 0-(2)	
第1版から第2版までに書かれた本書についての 所感的並びに反省的コメント		・・・ 10
	ページ 0-(3)-1~25	
「資本主義・社会主義・民主主義」第2版のための変更		・・・ 21
	ページ 0-(4)	
 第I部 マルクスの体系		・・・ 26
(1) 歴史の経済的解釈		・・・ 27
	ページ I-(1)-1~19	
(2) 経済学者 マルクス		・・・ 38
	ページ I-(2)-1~23	
(3) オストロ・マルキストなど		・・・ 55
	ページ I-(3)-1~19	
(4) その他 雑録		・・・ 67
	ページ I-(4)-1~4	
 第II部 資本主義は生き延びうるや?		・・・ 70
(1) 創造的破壊の継起		・・・ 71
	ページ II-(1)-1~15	
(2) 独占行動と無駄		・・・ 87
	ページ II-(2)-1~10	

(3) 資本主義システムの変質	・・・ 108
パセイジ II-(3)-1 ~ 23	
(4) 資本主義システムの死を招来させるに至る 自壊的体内疾患	・・・ 122
パセイジ II-(4)-1 ~ 35	
 第Ⅲ部 社会主義は作動しうるや？	・・・ 150
 (このテキストの主題、可能性が示す限りでの社会主義の経済学)	
(1) 社会主義のブループリント	・・・ 151
パセイジ III-(1)-1 ~ 38	
追加 1 ~ 6	
(2) ブループリントによる社会主義の比較優越論	・・・ 177
パセイジ III-(2)-1 ~ 49	
(3) (2)の補足的パセイジ	・・・ 214
パセイジ III-(3)-1 ~ 29	
(4) 社会主義システムにおける人間的諸要素	・・・ 225
パセイジ III-(4)-1 ~ 37	
(5) (4)の補足的パセイジ	・・・ 270
パセイジ III-(5)-1 ~ 66	
(6) 移行過程 ——社会化——	・・・ 298
パセイジ III-(6)-1 ~ 19	
(7) 社会主義の経済的バランスシート	・・・ 313
パセイジ III-(7)-1 ~ 4	
 第Ⅳ部 社会主義と民主主義	・・・ 318
(1) 社会主義と民主主義における様々なパターン	・・・ 319
パセイジ IV-(1)-1 ~ 9	
(2) 社会主義をめぐる権力への意志	・・・ 332
パセイジ IV-(2)-1 ~ 17	

(3)	民主主義の概念についての雑録	・・・	3 4 7
	パセイジ	IV—(3)—1	～4 5
(4)	民主主義を根拠付ける二つの理論	・・・	3 7 2
	——代表制理論(the representative theory)から		
	選抜(淘汰)制理論(the selective theory)へ——		
	パセイジ	IV—(4)—1	～1 8
(5)	民主主義的成功の諸条件	・・・	4 0 4
	パセイジ	IV—(5)—1	～5
(6)	移行の前線における諸屈折	・・・	4 2 0
	パセイジ	IV—(6)—1 - a、b、c、d	
		2 - a、b	
(7)	移行(過渡)期における「社会主義と民主主義」	・・・	4 3 1
	パセイジ	IV—(7)—1	～1 0
(8)	結論 社会主義と民主主義	・・・	4 4 3
	パセイジ	IV—(8)—1	～8
第V部	第I・II次世界大戦と社会主義政党	・・・	4 5 4
	付 アメリカ経済とケインズ理論		
(1)	第I次世界大戦から第II次世界大戦へ	・・・	4 5 5
	1) 第I次世界大戦の諸帰結	・・・	4 5 6
	パセイジ	V—(1)—1)	
	2) 管理資本主義に入った社会主義者達	・・・	4 6 5
	パセイジ	V—(1)—2)	
	3) 第II次世界大戦と社会主義政党の将来	・・・	4 7 5
	パセイジ	V—(1)—3)	
(2)	第II次世界大戦中のアメリカからの展望雑録	・・・	4 8 1
	パセイジ	V—(2)—1	～2 7
(3)	大戦直後の世界情勢と社会主義諸政党進出		
	の様々な様相	・・・	4 9 2
	パセイジ	V—(3)—1	～1 4
(4)	(3)の補足的パセイジ	・・・	5 0 7
	パセイジ	V—(4)—1	～3 4

(5) アメリカの事情、ワシントン経済学と ケインジアン・セオリー	・・・ 5 2 1
パセイジ V—(5)—1～12	
(6) スターリンとフランス・イギリス ・アメリカにおけるロシア問題	・・・ 5 4 0
パセイジ V—(6)—1～6	
編者後記	・・・ 5 5 5

序文(第一版)

0-(2)

本書は、社会主義という主題に即して、私のほとんど40年に及ぶ思考・観察・研究の積み重ねを一つの読みやすい形態に作り出す、という努力の結果である。民主主義の問題は、社会の社会主義的秩序と政府の民主主義的方法の間の関連についての私の見解を述べることが——後者についてのどちらかと言えば範囲の広い分析なしには——不可能であることが論証せられたが故に、本書の中の今占められている場所においておくことを余儀なくされた。・・・

私の仕事は私がそうであろうと考えていたよりももっと困難なものであることがわかった。配列せられなければならない異質の諸資料の断片は一人の個人——自分の生涯の様々なステージにおいて社会主義者でない者が通常もつよりは多くの観察の機会をもち、しかも自分がありきたりではないやり方で見届けた物事に対して反応してきた、そういう一個人——が持つ諸見解や諸体験を反映したものである。私はこの諸足跡を消すことを毛頭望まなかった。もし私がそうしたものを取り除くことを試みたとすれば、本書が要求するに価するとみてよいような関心の多くは失われたであろう。

(*)・・・広範にして異質な諸資料はいくばくかの個人的な手書き文書類から未整理な(秩序付けられていない)ノート類の山々に至るものであり、それらは部分的には不思議にも尚生きており、しかも自分達の主人や時代の神々に縋り付いている。・・・(書かれた後、線で消されている。・・・編者)

それ以上にこれらの資料は又ある一個人——いつも正直に表面下に探查を試みるかたわら、時代の中の如何なる期間に渡っても社会主義の諸問題を自分の専門的な研究からする主要な示唆としたことは決してなかったものであり、それ故に他のことについてよりもこの問題のいくらかの話題について言うべきものを多くもっていることになるのだが——の分析諸努力の反映されたものでもあった。私がバランスのよく取れた専門諸論文を書くことを狙っているという印象を生み出すことを避けるために、私は五つの中心的な諸テーマのまわりに私の素材を掌握するのが最善であると考えてきた。それらの間の様々な交差と橋渡しはもとより用意されてあ

る。そして私は望むものであるが、提示したものの組織的一体性のような何か成し遂げられることになった。しかし事の本質においては、それらは——相互に独立したものではないとしても——ほとんどが分析のもつ自足的な諸断面なのである。

第Ⅰ部はマルクス主義者の教条という主題に付き私が述べなければならないこと——並びに事実問題として私が20～30年間も授業を続けてきたこと——を非専門的なやり方で集約したものである。社会主義の主要諸問題の議論に福音の露わな呈示によって序を付すことはマルクス主義者に対してはなされて当然のことであるだろう。しかしマルクス主義者ではない者の一人によって建てられた家屋の玄関のところでしなければならないこととは何であろうか？ かのメッセージのもつユニークな重要性、受取りか拒絶かとは完全にかかわりのない一個の重要性、の中にあるこのマルクス主義者でない者の信条に対する立会人(witness)であることを担うというのがそこにおける立場である。但しそれは読解を困難ならしめる。更に引き続く作業の中ではマルクス主義者の諸用具(tools)は全く用いられていない。後者(作業)の諸帰結は再三にわたって、かの一人の偉大なる思想家の諸傾向と比較されるのであるが、マルキシズムに関心をもたない読者諸氏は第Ⅱ部から始めるのも又良しである。

第Ⅱ部——資本主義は生き残ることができるか？——では、私が試みたのは、社会の社会主義的形態なるものは資本家的社会の同様に不可避免的な解体の中から不可避免的に出現するであろう、ということを示すことである。多くの読者は怪しむであろう。速やかに一般的な意見に——保守層の間においてすら——なりつつあるものを確立せんが為、私は何故にかくも手間がかかり、しかも複雑している分析を必要とするのかと考えるのだろうか、と。理由は次の如くである。一方において我々のその帰結に対しては我々のほとんどが同意しているのだが、資本主義を殺しつつあるその過程の性質に関して「不可避免的に」という言葉に貼り付けられるべきその正確な意味に関して、我々は合意を得ていないということである。提示された諸行論のほとんどは——マルクス主義の者においても他の一層にポピュラーなラインの者もともに——間違っていると信じるので、私はそれを引き受けるべき私の義務であると感じたのである。そして私は読者に私の逆説的な結論に効果的に導き上げるために相当なる煩わしさを課そうとする。その結論とは、資本主義はその達成(achievement)によって殺されつつある、である。

我々がそうなるだろうと私が考えているように、社会主義は今次大戦の結末の中に直接的に実行上のこととなるかも知れない一個の実践的命題である、ということを見究めた上で、我々は第Ⅲ部——社会主義は作動できるのか？——の中で、社会主義の秩序がその下で一定の経済的成功であり得ると期待されてよいような諸条件に依存するものである一個の大きな問題の範囲を調べることになるだろう。この部は「移行上の」諸問題を含めて、その様々な諸論題につき、でき得る限り一個のバランスのとれた取扱いとなるようにしている。この問題には、これまでなされてきたような容易ならざる仕事——その数は多くない——の諸結果を愛や憎しみがぼかしてしまうことがあったので、広く受け入れられている諸見解の単なる再叙述にすぎないことすらもが、そこここで、正当化されるよう見受けられた。

第Ⅳ部——社会主義と民主主義——は、この国で進行しつつあった論争に対する一つの寄与である。・・・(*)・・・しかしこの部では原理的な設問だけが取り扱われていることに注意するべきである。この主題に関連した諸事実または諸所見は本書の全面に——特に第Ⅲ部と第Ⅴ部に渡って——撒かれている。・・・(**)・・・

(*)・・・しかしながら、我々の多くは民主主義をば、それを規定するよりもそれを愛するところが大であるので、この論争はスローガンの反復のさなかで尽くされてしまいやすい、ということを見出しているが如くである。極めて単純な結論に向かうとみられるものに到達せんがためには、合理化された基礎が置かれなければならない。いくらかの読者は恐らく自分自身の判断でその基礎部分に関心を向けるであろう。・・・(書かれた後、線で消されている…編者)

(**)・・・私は私がマルクス主義者では決してない、と述べた。私はマルクス学研究者でもないのである。マルクスがかつて書いた手紙、あるいはマルクス・エンゲルス研究所によって刊行された資料の全て、あるいはこれまで集められたマルクス主義者向けの諸テキスト、等々を私は読んでいない。しかし、私はマルクスの主要な刊行物を知っているし、その上、一人のエコノミストとして——分析技術に対しては専門家の目をもって——それらを読んだのである。これらを、私は敢えて言うのであるが、私はどんなマルクス文献学者(a Marx philologist)が行うであろうよりもよ

り良く理解するものであるし、しかもこれこそが私の解釈と批判を呈示することに対する私の正当性をなすものである。もっとも私はマルクスの手形清算についての知識においてはかの専門家達に及ぶべくもないのだが。しかし私が第V部を扱うためになさなければならない入場の許可は由々しきにおいて一層に大(much more serious)なるものがあるのである。(書かれた後、線で消されている・・・編者)

第V部は一篇のスケッチであることを目指したものである。・・・(*)・・・他の部門におけるよりも一層に、私は人物的な観察と——非常に断片的な——探索から述べられなければならないようなことに、自己限定するのを望んだ。それ故にこの部に向けられた資料は——疑いもなく痛ましい程に——不完全なものである。しかしそこにそれがあるところのものは生きている。

(*)・・・その導入的パラグラフにおいて指摘したように、私は専門家の標準を上向きに装いはしない。(書かれた後、線で消されている・・・編者)

本書の内容のどの部分をも未だ印刷して発表していない。・・・(以下省略)・・・

ハーバード大学 1942年3月 ヨセフ・アロイス・シュンペーター

第Ⅰ版出版後、第Ⅱ版出版に至る「本書」についての
所感的並びに反省的章句

摘要

資本主義の運命について批判された。「誰をも喜ばせるようするべきであったのか？　だが私は周辺の気分に合わせてそれを他のように書き替えることはできない。」反対に、「何故にフランクフルト学派はこの書に対してピグーと同じことを告げないのか？」。新版ではレトリックを行き過ぎのないよう、またトーンを控え目にするべきである。悲惨なトラブルを告げる場合ですら。それにしても戦後の信じ難い諸状況がある。意志喪失的混乱の誤った展望下に全てを置こうとするイリュージョン、幻想的な危険に対する幻想的な救済手段、アメリカにおける戦時経済からの回復、失業と過剰供給能力、インフレーションと価格・賃金統制。災禍を蒙った世界における絶望的悲惨に根ざす混沌。社会主義に向かう諸勢力と路線闘争、社会主義と民主主義、ロシアを専制的社会主義から解放する為のあと半分の仕事、避け得ない第Ⅲ次世界大戦(それはすでに始まっている)。もし諸君が本当に完全雇用を望み、経済諸活動の無駄を露呈しているような特別の損失を避けたいのならば、更に自由と責任を望むのならば、問題は全く他の問題となる、1)全てはいずれにせよ労働者達に属し、2)その功績は就業の機会ではなくして規律にある、ものだから。・・・その他
(編者)

第Ⅰ版出版後、第Ⅱ版出版に至る「本書」についての
所感的並びに反省的章句

0-(3)-1~25

1 うわべ(仲間)言葉の整理?・・・挫折・・・私は批判されている。・・・私は誰をも喜ばすことを好むべきである。しかし私は他のようにはなすことができないし、周囲の空気の下ではそれを取り消すこともできない。・・・

人々が満足しなかったのはどのところか?・・・

行論——論の展開——は結論を引き出すという追加的操作としても十二分に適切である。但し一点、言及だけがあって判断が何も付されていないことが、時折論証さえなされているとしても、その結論は長期のものではないものしか得られないということが。・・・ニューディール、官僚制、それに労働問題は調和させられている。・・・要約しよう。

2 私を叩いていたものはこれである——諸価値についてのこの破壊は宗教や私的自発性といったものを賞賛する人々によってなしとげられたものだということ。・・・カトリック教会はただ一つの厳粛な要素である。・・・もし我々がボルシェヴィストであるならば——私は属性的価値とは決して争わないのであるから——私は世界はそれに信をおいている人々によって押し倒されるということだけを了解するべきである。・・・大統領と議員は選出される前には真正の「保守派」である。歴史をもたないこの国のトラブルは体質(system)であった。次いで債務国に負債を取り除こうとさせるいくらかの余地をもたらした。・・・

3 本日、46年4月29日、お祈りに際して——このように終始、神に極めて近いところであって——あらゆる素朴さの中で、我々の時代の平和という帰結に向けてのこれがその瞬間だ、と私には直覚された。・・・更にその場合、それとの関連においてそれとは区別されるべき考えが、私は新版ではその類の何事かをなすことができるだろうか、という考えが浮かんだ。・・・それは一つのエラーであろうか?・・・お祈りの中にもエラ

一は来る。そして重要なことは、度を過ぎたことはしない、しかも修辞を次のようにする。すなわち悲惨なトラブルを告げるにも、落ち着いた抑制のきいたトーンで、又、簡潔なスタイルで行う。・・・導入(序)としては、ある地域的な平和についての思想、乃至は省察が？・・・そしてその場合、新しい章にはこの国の事情のみが。・・・「自分の諸利益を以てするこの国の政治(策)に対する由々しき妨害」が、それだけで国内政治の全てなのである。・・・更に全く信じられない。・・・意志喪失的混乱・・・手探り(保守派においても、但し彼らは多少なりの指示を意図するにすぎない)。・・・幻想、それは道徳的価値を破壊し、しかも全てを誤った展望のもとに置き、更に諸事実をあるべき諸事実にとどめ、すなわち願望的諸事実ならしめる。・・・どのように反作用がなされるか。・・・ロシアの資金、それは敵対的なプロパガンダを隠している場合であるかのように読める。・・・それに失業がない。・・・社会主義の背後にあるロシア帝国主義・・・コナント(Conant)は平然と言う。すなわち、あらゆることが起こり得よう、「起こり得る」は、恐らくは、他の一つか二つの国を「成り行きに任せる」ことである。そしてそれが告げられれば、戦争は避けられるのではないかと、そのことが見究められていない。・・・事実、かつてヒットラーが侵略したよりも多くの諸国民がある、フィンランド、ポーランド、ここではセンチメンタリズムは役立たない。

4 社会主義、その諸困難性——何故にフランクフルト学派は本書については、ピグーの著作についてなしたように、同じことを告げないのか。・・・それは「一連の事」(string)なのである。・・・私はこのことを忘れないでおく必要がある！・・・いつでも私は社会不安の中にある既得利益を引き合いに出すことができる——社会主義がそれを除去するであろうような物事のやり方によって——。集团的サボタージュと「農民達」——それはエゴイストの最たるもの——は実際上ありそうな社会主義の下では(そういう態度を・・・編者)ずばり取り止めるということにはならないであろう。・・・

社会主義に都合良しとさせるところの諸力・・・路線の闘争者であろうとする社会主義者達の情念、更に他の者達は等しく民主主義的に数え上げられた臣従者であるだけである。・・・非社会主義者の存在は過失であるだけではなくして、罪なのである。・・・聖パウロのノックにおける従者もまた様々である。・・・どの程度にまで(そしてどこで)社会主義者は民主

主義者であるのか。・・・立場の変換は戦争の論争、である。・・・資本主義は大衆のために何を為すのか？・・・(プトレミーの天動説は正確にかくも快適に旅した。)・・・広告は無駄ではない！・・・練り歯磨きそのものは役割をもつが、社会主義にあっても必要である。・・・

5 本書に対して・・・

独占と運命観、無益性と貯蓄(節約)・・・私の保守的ヴィジョンを事前に示すこと。・・・最終章における諸賃金についての論についての反作用の恐怖、他の労働者の犠牲におけるそれ。・・・労働者の利益は・・・インフレーション・・・計画を事前に示す、不人気な真実、大規模事業の立ち上げ・・・徒労に退化されてはならない・・・論外・・・復興債と不足払いについての妨害された議論

6 本書・・・本書は遊戯風の主題、並びに主題に対する反対論ではない。そうする機会はどのようにもある——しかし本書はそれを採らない。・・・採ることを拒否する、あるいは・・・

本の開始について、それは恐らくはポピュラーな諸源泉を開始点とするのが最も良いであろう。・・・

独占・・・率直な満足・・・

近年の不況、それより我々の時代における革命について、更にその必要性は100パーセントないこと。・・・宿命論——逃げ場がない。・・・唯一の大外衣——但しゲイトにおける守護錠である——がないので、潰れるということはない。・・・諸君は諸君自身を信じることができないのか。・・・空しきもの・・・民主主義と自由・・・

大問題、すなわち、ドイツと日本についてのこと。・・・ヒットラーはファシズムの生み出した存在である。・・・ロシアは押収よりも他の事は決定しない。・・・実処的な諸問題、すなわち、諸君が欲しているところのもの、強制、完全雇用・・・賃金と価格政策上の諸問題・・・自分自身の生活を創出する。・・・私が描こうとしているものは、その有機的全体の中にあるシステムである。・・・アメリカにおける革命・・・獄中における4つの自由・・・自由社会、小ブルジョワジーの国・・・私に賛成して、または私に反対して、何がなされるべきであるか、すなわち「計

画」。・・・独占についてと貯蓄(節約)についての外交的怒号・・・自殺——この大戦、ここでつくられるべき見取り図、どんなものかが注目されるべきである。

7 空しさと敗北主義についての序文的エッセイ・・・第一版の序文において私は本書の来歴を語った。全てはその中に書かれてある。しかし哲学として更にまとまりとしては把握してはいなかった。資本主義と共にあるこの百年の非経済的な事跡が関連に対する判断にとって決定的である。——何も起こっていなかった、となすほど当然であるとは言えない。・・・保守主義への言及——本書。・・・独占と経済学に対する異議と、についてもまた。・・・一つの事件(事情)をもつには適用されるべき事情がある。・・・あって欲しさではない。・・・一個の社会システムの諸長所の認識は決定的なものではない。・・・かの優越したシステムは、それらが良くなつた時に消滅する。アントニウス・ピオウス(Antonius Pious)あるいはディオクレティアンでさえも、プリニウスでさえも・・・

- 8 序文・・・私が準備不足で見落としているもの・・・
- 1) リーダーシップについての、又静態化についての我々の欠如・・・
 - 2) 階級闘争の重要性の喪失についての何事か・・・
 - 3) ファシズム・・・
 - 4) 教会・・・
 - 5) 良質のストックの絶滅・・・
世界諸勢力 対 活力と光輝を失っている問題・・・諸小国を売り渡す・・・
-

- 9 I 第二の変更・・・完全に不可能というわけではない・・・アメリカの労働事情とギルド社会主義について・・・
はっきりと今や他の労働者に反対するストライキがすでに・・・
- II 第一の変更・・・私の指標との比較・・・
- III この国(合衆国)における事情と経済的帰結・・・仮に国家的保障

があったとしても、私的エキスパートの出来難さがある。・・・「そこに守られるべき何かがあることがないならば」。・・・

- 10
- 1) 変更はない。
 - 2) 敗北主義 一より少ないとしても一 表出する・・・
 - 3) 前言はペシミスティックであった。だがそれは私が予想していなかったものである。しかし我々自身をブルジョワジーの立場におき、しかも彼が何も望み得ないということである。・・・利益と安全だけでなく、名誉と礼儀においても衝突することに盲目且つ聞こえず、である。・・・
 - 4) そしてそのようにして手先(他人の道具)として労働者階級と共にする事態となるだろう。・・・

我々はそれが不可能であるところのものを受け入れ、それを信じるべきだとする。・・・我々の下には、だが常にすべてを信じる人々がいる。・・・意志喪失と儀礼形式・・・あるいは最終章において・・・経済と社会事情について、を。・・・「煩わされることになったであろう敗北主義は多大でない」。・・・合理的な闘争は本質的なことであるが、その傍らで我々は完全雇用についてナンセンスを語る。・・・

11 新版・・・

現実に変えられるべきところは何もない。・・・

一層更なる開拓が、但し他の批評家は、このことが一個の新しい要請を招来するのだ、ということを理解できない。・・・はかない・・・

アメリカ人の視角・・・実処的推定・・・連邦物価統制局、諸賃金、諸課税、利子・・・必要な諸事物をファイナンスすることは経済的失策ではない、すなわち、周辺諸条件が状況を不可能ならしめているのである。・・・諸々の事柄が我々の眼前に、我々がそれらを了解できない程に、はっきりと置かれることができるであろう。・・・大企業体の創出・・・完全雇用・・・英国社会主義についての、本当の雇用問題(ベッケ)、それに賃金問題・・・利子問題・・・世界戦争の作用・・・資本主義的な再生産は可能である、しかし・・・悲惨なゲームを演じるにはあまりにも老いている。・・・ギルド社会主義・・・ビスマルクとモーゲンソーについては、私は忍耐なく

しては語ることはできないだろう。・・・赤字財政と均衡予算についても・・・差異はない・・・何故にヘーゲル主義者は資本主義と平和を書かないのか。更に国家の保障を以てする輸出。・・・恐らくは、最後の章で告げることは尚可能であろう、すなわち、かくも驚くべきことは反ヒューマニティ——チンギスハーン——なのではなくして、その全き非合理性なのである、と。・・・すでに第一次世界大戦において、何事かの中にもっと空しいものが、すなわちオーストリア・ハンガリー君主制を破壊した時のフランスと偉大なる成功がそれを再度高揚するようにセットされたであろうところの事と区分することに。・・・それと恐らくは戦後需要・・・そして恐らくは計画が？・・・所得税について・・・ベバリッチとマレー・・・悪徳 対 再建・・・サボタージュ、仰々しく言う、諸君が欲したもの、そして私がそうしたいところのものを。

1 2 「歴史の哲学」があるのだとすれば、私は新しい章でこの視点を前面に設けることができたのでは。

a) 底流をなす傾向

b) チャンスといったもの

帰するところハーディーに・・・

合衆国においてサンジカリズムの可能性があるのは、禁止するどんな社会主義政党もがないからである。・・・

1 3 第Ⅱ版のための哲学的(しかもご機嫌取りの)序文・・・弁明・・・批判に忍耐強く・・・有効なもの何か、そしてどのように・・・そこで、それが先ず第一に、次いで私の・・・が、そして他の事と僅かな事等々と。・・・できるならばの時のみ・・・一つの問題の解決への最初の一步はそれを認知することである。・・・社会主義者・・・資本家・・・

1 4 資本主義のための前言・・・敗北・・・他の類書に比較しての本書・・・有用な剥奪(放逐)が出てこない。・・・しかし今日では人々は疲れており、彼らはイエスかノーかを求める。・・・慰めのための賛成と反対・・・自

由進歩主義についてのオールド・ボーイ達の定義・・・そして最終章では、課税、OPA(連邦物価統制局)、諸賃金がシステムを機能させないために十分なものがあつたことは、全く明瞭であることを。・・・しかもそれは望まれなければならない。・・・凡庸の仲間・・・

15 最終章・・・再び改革 対 回復・・・

同じ構図が描かれようとするから同意が得られない。・・・国が挫折している真只中に資産そのものが輸出されるよりも更に悪いことはない。・・・労働者が他の労働者に反対してストライキを行うことも同じ。・・・ドイツの30年代におけるように。・・・「敗北主義」・・・「熟考する」・・・

16 もし私が最終章を冷静に保っていくことに成功するならば、恐怖と無秩序な破壊についての法則に遭遇し且つ必要でさえあるのか。・・・

17 民主主義と自由・・・逃避主義と敗北主義・・・反民主主義——敗北の一形態・・・友と敵に対する認識が本質的・・・政治的な書物ではない。・・・それは蹴る馬に対しては残忍である。・・・

18 章・・・もはや実処的な諸問題の中にはない。引き続き諸配慮は戦争の作用の社会的構造と社会主義者諸グループの諸特徴に及ぼしたものを含む。・・・イギリス・・・ロシア——流布されている解釈が全く誤っているほどに込み入っている。我々はそれが成功をもたらしているもの他に、合理的専制を認める。他の戦勝諸国と似ておらず、それはこの他にその指導者に対し、その戦術に、聖なるロシアの度を越えた賞金を再要求している。紛争はない。・・・自暴自棄的な被占領地・・・どんなチャンスが・・・休むことなく、また、疲れ果てた逃避主義者、我々は政策に民主主義的政治を求めている。

19 一つの可能性はただ序文の中にある(そうすることでそれは本来的に新しい章への導入となるだろう)。描かれるべき世界状勢、際立った事実、ロシアの勝利——イギリスや合衆国を超える勝利・・・そして、それは専制を強化する。・・・このようにしてロシア国家は次のように告げられること多大である、新しい軍備、新しい災禍である、と。・・・スエーデン、スイス、スペインでさえもの降伏は・・・恐怖とポーランド・・・爆撃を以てするだけの占領・・・ロシア国の性格(紛争ではない)と意志の診断・・・どの程度に「同じもの」のうちにあるか。・・・

更に信じがたい諸現象がある、a) ほとんど明白なことであるが、認知されていない、b) この専制が「自由諸国」に対する同盟関係を保持していたということ。・・・すなわち社会主義の事情・・・問題が主張されることが出来る前に明白なことの再表明。・・・弱い社会に対するに警察の役割を伴っているような冷酷無慈悲な論理。・・・ a) 何が起きるかの予測、b) 状況・・・変化しつつある。・・・

20 序において、何故にないのか・・・ファシズム・・・カトリック教会・・・

21 第一に・・・敗北主義は行論(an argument)ではない。・・・

第二に・・・何かに適用するものではない・・・権利と義務を根拠付けること。・・・

第三に・・・合理的行動に向かったの第一歩は問題に立ち向かうことである(問題を解くこと、それを認識と言う)。・・・
上記についてはうまくいかなかった。「全てのところでなされるべきである」。・・・諸々の消費者銀行は単に行政機関ではなく、そして単に「そうであると、信じられ得る」だけのことである。・・・イギリスにおける第二次大戦時の部局(B)の進化は全く社会主義者の助言を伴った一部門の如くであった。・・・見せかけ・・・なされることのできる全てのこと、それは社会主義者の注目すべき位置。

2 2 新しい版・・・闘っている彼の世界観がある。・・・実処的諸問題
— 無問題・・・厳肅性・・・

a)、b)、c)を阻止するための完全雇用・・・より容易なものは何もない。・・・
ロシアとの紛争——第三次世界大戦——ソビエトとの紛争ではなくして
ロシアとの紛争である——より真正の帝国主義・・・共産主義者の危険に
ついて・・・a) マルクス主義者である、b) リベラルな社会主義は別な
のか？・・・

2 3 序文または章で・・・

道徳的に、及び、政治的に、更に防ぐことを為しえない、そして現今の
諸態度においてそうである。・・・責務は尚一層に大となっている。・・・
逃避主義、あたかも爆弾が唯一の問題であるが如くに！・・・怖いものの
示唆。・・・官僚制が——それを統御する——諸力を創出するならば、と
言っているが如きこの見解・・・(低位利用にある機構に侵害を加える要
求)・・・民主主義は——我々が見究めようとしている権力政治のゲーム
に替えて——方針喪失性を意味する(全ては酒宴に乗り替えられる)。完全
雇用——実処的問題としてのそれ・・・労働者達のあらゆる成果が他の労
働者達のコストの上に得られる、ということの想像上の危険はない
か。・・・ロシアとのトラブルはない——そしてそれはいつも、すり替え
られている。それが理論家のパターン(マルクスと向かい合っているところ
の)である。・・・そこでロシア帝国主義・・・暴利取得者・・・いまだ、
第二次大戦の社会学を書く時ではない——だがはっきりとマルクス主義
的でなく・・・その場合、「如何なる意味において」。・・・

2 4 第二版への序文・・・人間的諸事象に根拠を適用しようとする前判
断——但しそれは次の認識を含蓄する。「なされるべきことは愛と憎し
みに依存する」と。・・・ハーディの不署名(Hardy's no signature)・・・意
図されているものはいつも安楽である。・・・合衆国の対外政策——道徳
的であるほどには正当化され得ない政治学としてのもの——は政策がな
い。と言うのは、政策は国内政策であり、しかも正にユーモアを伴ったも

のだから。・・・

25 新しい章の中に、一案？・・・

誠実性に基づかされている。・・・例えば失業・・・イギリスの課税システムからがもっと良いのでは・・・

明らかに仕事の他の半分がなされるべくして残っており、しかもそれは軍事的にのみ解かれることができる一個の問題に対しては行使が必要である。・・・更に理論上の困難はどこにでもあるということ、人々にそれらをだまして見せようとするものであるということ、政治的に彼等が願望しているものが経済的に必要なのだということ。・・・現実に意図されているものが現実にある場合、そのようにすることだけが、完全に単純であるような諸問題を創出する。・・・デフレーションとインフレーション・・・完全雇用・・・

倒れるには任せられない一個のシステムがある——その故は民主主義的な賛同がないからであるが——それを働かせないよう決定させられるだけなのである。・・・

インフレーションはどこまで利子引上げによって吸収されるというのだろうか！・・・

想像的な危険に対する想像的な救済手段。・・・ケース、防ぎ得ない第三次世界大戦、(すでに始まっている)。・・・

もし諸君が完全雇用を、a) 災禍を避けるために、b) 劣化を避けるために、c) 社会的損失を避けるために、本当に欲するというのならば、経済活動の無駄(浪費)を露呈させること、——幾分かは容易となるだろう。・・・もし諸君が自由と責任を欲するというのならば——何故にそれは幾ばくかのコストと経済的キャパシティの不使用といったことが。・・・アイデアの出来前・・・

全く別の問題、a) 何がどうあろうと労働者の手中に全てを行かせるものであるが故に——彼等は株主(die Aktionäre)である、b) 利点は労働の機会ではなくして規律であるが故に。・・・改革 対 回復・・・完全に真実、完全に正しい・・・

「資本主義、社会主義、民主主義」第2版のための変更

0-(4)

考え方は本書を完全に変化のないままに、そこで用いられている用語上の——支持されているように見受けられる——訂正すらをも行うことなく、世に送ろうということである。そうしないと読者の心の中に、著者が以前に書いた何物かを撤回、乃至は修正しようとする何等かの意向を胸に秘めている、という印象が起りかねないということを守るためである。新しい諸材料は新しい序文と第V部の末尾に追加して一つの章を付すというやり方で追加されるであろう。(第XXVIV章 第二次大戦の帰結)

この序文は、本書の行論に反対して引き起こされた異論に対する他は何物をも付け加えないのであるが、「敗北主義」という非難と取り組むことで充分であろう。いふなれば、分析家が見出した社会の諸パターンや諸傾向を——結果として得られる構図が喜ばしいものであるのかないのかを問題にせず——提示するという権利と義務を再主張することがそれであろう。しかしそれはまた、どのようにそうした分析の諸結果が実践的な政治的使用におかれるかを示すことにもなるであろう。

新しい章は社会主義諸政党の歴史的スケッチをより新しい時期にまで引き上げるだろうものであるが、二つの目的に資することになるだろう。一方において最近の数年間を通じての様々な出来事の行程をこれに先行する分析の枠組みに適合させるであろう、更にこのようにして後者の信頼性のテストと予見のための基礎を提供するものであろう。他方において、それはアメリカ合衆国とヨーロッパの現在の経済的並びに政治的情況の含蓄を論じることになるだろう、そして大戦によって形作られた社会的変化を評価することの試みとなるであろう。そこでは至る所で行われている共産主義諸政党の、社会主義諸政党の融合や他のやり方での、支配の試みについてのいくらかのコメントがなされることになるだろう。

賛成または反対の立場・・・我々は真理に賛成の立場であることはできないのか？・・・我々の行論のための真直な行論・・・最終章のために食味(appetite)をつくる・・・表明はケース——他のものに対する——によって伴われることができる・・・但し(?)に対してそれはあるのではない・・・逃避主義者にある、敗北主義者である。

・・・本書の中にほのかに描かれた歴史哲学へと・・・。それにも拘わらず、それはある導入を必要とする。というのは、その行論は本書の他の部分よりも一層に「敗北主義者」として読者を印象付けるであろう、そこでレッテルなるものは、読者の心からある行論が生じるのを防ぐことにおいて効果的であるが故に、敗北主義と逃避についての短い論考のためのこの好機を用いることが私に見出されるということになったのである。

しかし、他の論点もある。これには私は先ずはコメントを付すのが好ましいとなすべきであろう。多くの読者といくらかの批評家は第Ⅱ部における独占問題についての私の取り扱いにより衝撃を受けたように見受けられるのである。

私の行論は、疑いもなく、確証されている諸事実が扱われている限りにおいて、現代世界には、本書において限定されたような特定の意味における社会主義へ向かおうとする強力な傾向が存在する、という帰結を生み出しているのである。このように設定せよ。この命題はそれが奇抜であるということ以上には驚くべきことは何もないのは確かである。このテーゼのあらゆる奇抜性はその傾向に対し私がもつべき責任のある諸要因の中にあり、それに——実際のところ次の逆説的とも言えるいくつかの批判をうちつけているところの他の命題に縮約されてもよいような——諸要因の中にあるのである。逆説的な批判とは、資本主義は殺されつつある、経済的な失敗によってではなくして経済的な成功によって、更にこの成功がその社会構造に対してもった諸効果によって、と(**Capitalism is being killed not by failure but by economic success and by the effects this success has upon the social structure.**)。私は社会主義や他の何者かを弁護する意図を私をもたなかったことを明瞭たらしめるようにあらゆる配慮を尽くしてきた、と私は考えてきた。それにも拘わらず、私にとって途方もない楽しみとして、私は実際に告発された——・・・の如くでなかったとしても、一度ならず再度に渡って・・・。

(以上の部分は次の論述に取り替えられている・・・編者)

・・・本書の中にほのかに描かれた歴史哲学へと・・・。それにも拘わらず、ある導入が必要である。というのは、私の行論の尚より多くの他の諸部分が——全体としての本書の持つてはいないところの——特定の誤

解にさらされているその状況についての私の諸コメントであるからである。この序文の残りのところで、私はそれ故にこれらの誤解のうちの少なくとも一つ——私の敗北主義と呼ばれているその部分——を清算する好機会を私自身利用したいと思うのである。

本書の行論は、確認され得る諸事実が扱われている限りにおいて、現代世界には社会主義に向かおうとする一つの強力な傾向、すなわち、経済的諸事象の管理が私的企業者の手中から公的権威の手中にと移されていく一つの傾向が実存するという結論を疑いもなく生み出している。このようにおくならば、叙述はそれが奇抜であること以上に驚くべきことは何もないのは確かなのである。奇抜であるところのもの、それにいくらかの読者によっては驚かされていると感じさせられたであろうところのものは、私が呈示したその傾向のもつ動機なのである。しかしながら、何等かのそうした傾向の存在の認知または否定は、それが指示している方向に向かおうとする到達点を我々が愛するとか憎むとかとは、論理的に言って全く関わりのない問題なのである。私はそのことを全く明瞭ならしめるようあらゆる配慮を尽くしてきた、と私は考えていた。そしてとりわけ、誰かが好まないいくらかの事件の予言の中にも背理的ではないということである。それにも拘わらず、私を途方もなく喜ばしたものとして私は実際に咎めだてられたのである——一度ならず再三に——私が「外国の集産主義を説いている」として——私が知っている限り印刷されたものはなかったけれども。

私に繰り返させていただきたい、そこで、「私は何事をも提案していない、私は何事をも押し付けていない、私は露呈しておくのである」(je ne propose rien, je n'impose rien, j'expose.)。すなわち、私は如何なる説教もなしてはいない。私が行いたい全てのことは、保守主義者にも社会主義者にも等しく便利ならしめるために、何故に諸々の事物はそのようであるのか、及びそれらは何故にそれらが動こうとする道程において動くのであるか、を説明することなのである。更に進んで、資本主義が「死の審判を受けて」いる、及び社会主義が「不可避的」である(capitalism is “doomed” and socialism is “inevitable”.)と言う時、私が抱いて意味を規定するのに私はあらゆる注意を払ってきたと考えていた。もしその内在する理論に従ってそれ自身が働き尽くすことが許されるならば、あるいは同じことであるが、もしそれを排除しようとする傾向が出現しないのならば、社会主義をもたらすであろうという先述の傾向の存在に至るということ、これが私の構築しようと思っている——そして私は尚もそれを構築

したと考えている——ものの全てなのである。

この論述が何等かの特定の国における諸事物の実際の行程についての予言を意味しないことは明瞭とされるべきであり、諸事物の起きる時機の宣託であることは尚一層に乏しい。起こり得る諸事実のしかるべき集合の集約に資す、ただそれだけのことなのである。その命題が社会学的決定論を語っているのでもない。と言うのは天文学の体系とは似ておらず、社会現象の体系は一意の決定を許さないのである。そしてこのことが可能ではないとなると、決定論は唯物論的形而上学の教条に還元され、そこで——それ故に——科学的意味——または「操作可能な」意味をもつことを止めるのである。仮にそれが何等かの意味をもつとしても、それは運命論あるいは——資本主義的文明の立脚点に基づいて言えば——敗北主義として扱われるべきものは何ももたないこととなろう。何となれば、これらの言葉は行動している人達の諸態度を呈示するものであり、観察者の諸態度には適用できないものであるからである。諸事実はそれら自体、だからして、諸事実についての表明は決して敗北主義でもその反対でもありえない。

(*) 敗北主義は、もし何事かを意味するとすれば、いくつかの諸グループの敗北の予見、あるいは敗北主義者がそれを以て自身を同一視するところの動機を意味する。本書において、あるいは私の科学的な仕事一般の中で一貫して私は私自身をどんなグループとも、どんな動機とも同一視していない。

しかし私は、まさしくこの行論によって、ほとんどの人々が多くのより更なる打撃となるような負い目と考えるであろうところのものに、私自身をさらしたことはなかったか——無価値であることの負い目——？ 本書に呈示されたような膨大な不吉な諸事実、とりわけ資本主義社会の解体過程がはるかに進んでいるという諸事実、それらが実務上は関係なしとすれば、一体どのようにして敗北主義以外の何事かを示唆できるというのか？ よろしい、ある船がゆっくりと沈んで行きつつあるという趣旨が盛り込まれた一部のレポートがもつその実践的諸用途を想定しよう。船を浮上させんが為のクルーによってそこで採られた諸手段は、事実上、無価値でありえよう。そしてそのレポートを受理した精神は——そのレポートがそこにはそれを無価値と呼ぶことの中に、そこにはそれを <例えそのレポートが「それについて何がなされるべきか」の設問に向けて進められるものではなかったとしても> 敗北主義者と呼ぶよりも利益となるもの

は何一つないという内容のものである限りにおいてだが——事実上、敗北主義者でありえよう。一個の問題の解決に向けての第一歩は、そのケースの諸事実を検証することである。そうすることを拒否する者は逃避主義である。逃避主義者の態度は不吉なる諸事実の率直な呈示であるというよりは深く根を下ろした敗北主義の一層増幅された呈示である。時折、それは放棄の一形態である。

読者はこの新しい章を精読する場合、このことの全てを心に留めておくことが要求される。第二次大戦の社会学を書くには時機が至っていない。しかしその帰結は当然あるべき疑問を超えてはつきりしている。何であれ、今次の大戦は、私が第一次大戦の帰結について語る場合の様相を更に加速している影響として、私が叙述しているものを抱懐している、しかもその影響は、ロシアの勝利がその敵に対してだけでなくして、その同盟国に対しても覆っている、ということの政治的意味合いが支配している事柄によって複雑化されている。諸々の物事の単純な状態から創出されているものであるところの滲透しつつある逃避主義、あるものはこれだけである。更に逃避主義は、またもやそれを敗北主義者と呼ぶことによってその章の行論をそのようにおこうとするであろう。私が望みうる唯一のことは、いくらかの読者がそうはならないだろうということである。これらのことすらもが、「何かなされるべきか」に関して、助言をあやまることになろう。

但し本書は政治的な著作ではない。叙述と説明(「分析」)は私の選んだ仕事である。私は私のなしうる限り、ベストに、それを完成したい。そして私がそのようになすことの唯一の途は、それをまもることなのである。慰めと助言に対しては、私は読者に対し、それを身につけている人々たるように任せる。

タコニック、コネチカット、1946年3月

J・A・S